

日本喉頭科学会会員の皆様へ

平素より多大なご尽力を賜り、誠にありがとうございます。

日本喉頭科学会 作成

「加齢性声帯萎縮症の診断基準」

が無事完成したため下記に公開させていただきます。

▼加齢性声帯萎縮症 診断基準：

- ・加齢変化により声帯萎縮を認める
 - ・ストロボ検査にて閉鎖期を認めないもの
- 上記を満たし、他の声帯疾患を除外したものとする。
以上を、加齢性声帯萎縮症の診断基準とする。

皆様にはパブリックコメント等にご協力をいただき、誠にありがとうございました。
頂いたコメントに対するワーキンググループの考えについては下記をご覧ください。
作成にあたり多くの方々の貴重なご協力を得ましたこと、心から感謝申し上げます。
今後とも引き続きご支援宜しくお願い致します。

日本喉頭科学会

加齢性声帯萎縮症の診断基準 ワーキンググループ

委員長：渡邊雄介

委員

折館伸彦（日本喉頭科学会 理事長）

金澤文治

佐野大佑

楯谷一郎

中村一博

長谷川智宏（事務局）

平野滋

松島康二

松崎洋海

（50音順）

7 名からの意見(重複あり)

1. 年齢 4 件
2. ストロボスコピーに関して 3 件
3. MPT での基準 1 件
4. 萎縮と溝の鑑別について 1 件
5. どんな発声法 1 件
6. 低緊張など機能性との鑑別 1 件
7. 重症度分類について 1 件

1. 年齢 (4 件)について

加齢性声帯萎縮症の加齢性という定義について、我々WGとしては、あくまで老人性も含めて、加齢性声帯萎縮症と考えています。つまり、加齢しているのは声帯であって患者本人の年齢は必ずしも必要ではないと考えています。やはり、本WGでも年齢による議論が行われました。我々の実臨床では声帯萎縮は確かに高齢者で多いことは経験していますが、和文英文とも文献を参考にしても65歳よりも若い声帯萎縮症例も少なくありません。確かに、WHOでは高齢者は65歳以上と定義されていますが、例えば50歳などと年齢を決めても声帯の加齢と実年齢の間に根拠がなくあくまで声帯の診察において判断すべきであるとの結論に達しました。つまり、65歳、と仮に決めてしまいますとその年齢まで疾病と診断されず治療介入を待たなければいけない症例もあり、患者の音声改善機会を奪うことになりかねないと判断しました。

2. ストロボスコピーに関して 3 件

例えば海外報告例をあげると、ピッツバーグ大学HPには、加齢性声帯萎縮症の診断にはストロボ検査が必須でかつ一番重要と記載があります。また、ストロボ検査については確かに有していない施設もありますが、まずは音声疾患を治療している音声専門の医師が診察すべきと考え、ストロボスコピーの診察は必須と本WGは考えています。

3. MPT での基準 1 件 今回は考えていません。

4. 萎縮と溝の鑑別について 1 件 その通りですが 今回はあえてふれません。

5. どんな発声法 1 件 楽なピッチ 楽な大きさでの発声法と考えています。

6. 低緊張など機能性との鑑別 1 件

機能性との鑑別は また違うディメンションでの問題と考えています。

7. 重症度分類について 1 件 今後またパブコメで発表いたします。